

おばあちゃんのおかげで

金城 音和きんじょう ねわ

「いつまでテレビを見ているの？ダンス教室に行く時間ですよ。」

「今日、ダンスに行かないとだめえ。」

最近、習いごとがある日は、お母さんといひ口げんかになってしまふ。私はダンスを幼稚園から始めている。習いごとを始めた頃は大好きでたまらなかつた。楽しくて、ダンス教室の日が待ちきれなかつた。しかし今では、どうしてもやる気が出ない。「めんどうさい」という思いの方が大きくなっている。

そんな気持ちだからだろうか、私はダンスの発表会でとんでもない失敗をしてしまった。

「音和さん、どうしたの。全然踊れていなかったよ。」

私はメンバーに迷惑をかけてしまった。

「だから言ったでしょ。ちゃんと練習しなさいって。途中で振り忘れなんて。」

私は、お母さんもガツカリさせてしまった。でも、おばあちゃんだけは違った。

「音和のダンス、だんだん上手くなっているね。ばあちゃんは音和のダンスが好きだよ。」

とほめてくれる。私が出演する発表会には、どんな場所でも必ず見に来てくれる。元気なおばあちゃんだった。

でも、そんな元気なおばあちゃんが次の発表会には姿が見えなかつた。何とおばあちゃんは、足を骨折してしまい入院していた。

「おばあちゃん、大丈夫？」

「ごめんね。音和のダンス、見に行けなくて。もう、前みたいに歩

けないかも…。」

「そんなことはないよ。おばあちゃんは必ず治るよ。元気出して。」

「おばあちゃん、リハビリ頑張るって約束して。あきらめないって約束して。必ず次の発表会には見に来てね。」

私は、大きな声で叫んでいた。

「ありがとう。おばあちゃん、頑張るね。」

私達は指切りげんまんをした。

「お母さん、ダンスの時間だよ。早く行こう。」

「おばあちゃんが歩けますように」という願いで、必死で練習に励んだ。

「先生、もう一度お願いします。」

「今度は私がおばあちゃんを元気にするんだ」という思いで、一生懸命ダンスに打ち込んだ。

そして、発表会の日。

「音和ー。頑張れー。」

おばあちゃんの元気な声があった。大きく手を振るおばあちゃんが見えた。私の目に涙があふれ出てきた。そして私の体に熱い気持ちが入り込んできた。「ダンスってこんなに楽しいんだ。」私はダンスを習い始めた頃の気持ちを思い出した。「ダンスってこんなにも、周りの人を笑顔にできるんだ。」私はダンスをすることの意味、大切なことに気づくことができた。これもみんな、おばあちゃんのおかげだ。

「おばあちゃん、ありがとう。」